

村岡博の英語教育観とその教育実践方法

Hiroshi Muraoka's English Language Teaching Views and his Method of English Teaching

古 家 貴 雄*

FURUYA Takao

要約：戦前の教員養成機関において、学生に教師の教職的教養教育を提供したほぼ唯一の学校である東京高等師範学校の附属中学校の教員スタッフであった村岡博に焦点を当て、彼の英語教育観や英語教育実践について述べていきたい。そのために彼の教育や教員生活のキャリアの概略の説明から入り、彼の学校で実践されていた新教授法の論考、初学年の英語教育導入に関する論考等について見ていきたい。その中で述べられた村岡の英語教育に関する指導観や英語教育における特定のテーマに関する考え方について、その特徴を考察してみたい。

キーワード：村岡博，高等師範学校附属中学校，英語教育観，新教授法

I はじめに

私はこれまで、戦前において唯一教職教養的な科目、具体的には教授法と実習をカリキュラムの構成要素にしていた教員養成機関である高等師範学校、特に東京高等師範学校に関する研究を行って来た。一連の研究の中で、その学校の教員養成の中核、実践的な教授能力の養成に大きな力を上げて来たものとして東京高等師範学校の附属中学校の存在に注視してきた。この学校は、Oral Methodを日本人用に改良した新教授法を学校での英語の教え方の中心に据え、本校（東京高等師範学校）の学生の実習においても、英語教育に関係する学問に精通した教員によってOral中心の英語の教授法の指導が行われ、そうした英語授業力の育成が達成されていた。結果的にその実習を体験した優秀な学生が世に出て、後に有名なOral Methodを主体とした英語教育実践、福島メソッドと湘南メソッドを生み出し、Oralによる英語教育実践の波を全国に伝播する中で日本の英語教育に影響を与えた。

そんな私が注視する東京高等師範学校附属中学校でOral Methodによる特徴的な英語教育を支えた教員の中から村岡博を今回は取り上げて論述したいと思う。彼は、全国的には岡倉天心（覚三）の著書の一つである『茶の本』の翻訳者として有名な人物である。だが、彼は、それ以外でも、英語科におけるOral Direct Methodである新教授法の優秀な実践者でもあり、英語の初学年教育の造詣も深く、さらには、英語の試験・考查方法、英作文・英文法教育等においても彼独自の思想や視点を持っている。

本論考では今回、以上の中の2つ、初学年教育、新教授法についての村岡の業績と英語の実践方法を見ながら、彼の英語教育観と教育実践方法を見ていくことにしたい。

II 村岡博の略歴

村岡の略歴について、いくつかの書籍を引用しながら、その人的概略を述べてみたい。まず、伊

* 教育実践創成講座

村（1997）によると、彼は、明治28年（1895）に山口県で生まれ、昭和21年（1946）に51歳で亡くなり、大正9年（1920）に東京高等師範学校の英語部を卒業し、大正12年（1923）より昭和15年（1940）まで附属中学校教諭を歴任し、昭和16年（1941）より東京高等師範学校の教授になったとしている。なお、Palmerが所長を務める英語教授研究所の第7回英語教授研究大会で授業実演をしている。また、高等師範学校卒業の同期生として元東京師範学校教授、附属中学校教諭の寺西武夫がいる。また、彼は戦時中の昭和20年（1945）に陸軍少尉として応召、九州にも駐屯した。

高梨（1985）には村岡のエピソードが色々と書かれている。まず、高梨が高等師範学校4年生の時に最終学年で英語教授法を教わったのが村岡だったという。彼は当時附属中学校の英語科主任の任にあったようだ。村岡の印象は、謹厳な方というイメージで、「教授法の講義も真面目なお話ばかりで、熱心にノートをとったはずなのだが、内容は少しも記憶に残っていない」（p. 130）と書かれており、興奮を覚えたという福原麟太郎の英文学史の講義とは対照的に書かれている。ただ村岡の授業の中で、高梨が印象に残っていたのは、「教壇に初めて立つ者の心得を説かれた。その言葉は、世間を知らぬ若い者に対する先輩としての暖かい気持ちがこもっていた」（p. 131）というものであったという。高梨はまた、村岡の次のような訓戒が耳に残っているという。それは、「女学校へ行ったら、教場で女子生徒をじっと見つめてはいけません。誤解されるからです」（p. 131）、「板書は上手な字でなくともよいから、きれいな字で書きなさい。心がけてさえおれば、きちんとした字は書けるものです。それから略画辞典を買うとよい。練習すると、すぐうまくなる。黒板に絵を描くと、授業は生きてくるものです」（p. 131）、「自分の奉職している学校の町で遊んではいけない、遊ぶなら他所で遊ぶ」（p. 132）という村岡の言葉である。これらの訓戒においては、女学校で勤める時の注意点、板書の方法、教師の学校の近隣地区での過ごし方がアドバイスされ、高梨のいう村岡の謹厳実直さや先輩としての暖かい気持ちが感じられる。特に最後の訓戒に関して高梨は、「旅の恥は掻き捨て、とか。けしからんことを言うものだと思ったが、後で考えてみると、なかなか味がある」（p. 132）という。なぜかという、続けて、「凡人である悲しさ、いつも聖人君子でありうるはずがない。ときには羽目をはずしたくあることがあるかもしれない。しかし教師たる者が、同じ町で事を起こせば、若気の至りではすまされぬ。他所へ行ったら遊べるんだ、という心の余裕があれば、ぐっと堪えることもできるであろう」（p. 132）と述べ、村岡の忠告に一定の評価をしている。

以上の、記述から、村岡の人柄は謹厳だが、暖か味のある人物であることが分かる。その証拠として、福原（1978）には、村岡に関するこんな記述がある。その本の座談会の中で当時附属中学校での同僚の石橋幸太郎は、村岡についてこう述べているからだ。「石橋 その当時の附属には、村岡、左右田、中山、山辺さんなどがいました、後の二人は今もいられるが、村岡さんというのは非常にきちょうめんな方だったから、そのあとについて行ったわけだね。村岡さんからずいぶんいろいろなことを教生は教わったと思うんだ、こまかいことをね。行儀とかそういうことは、青木（常雄）先生なんかもずいぶん本校（高等師範学校）でやっていられたようですが、実際に教壇に立ってやるといろいろ気のつかないことがあるんですね。そういうことはずいぶん教生で教わっていると思うんです。それがやっぱり村岡さんのような人がいなくちゃできない、そういうことを非常によくされたと思うんだ。そのかわり行儀の悪いのはびしびし叱りつけたりしたね。批評会のあるときなんか、眠ったりしているのは村岡さんにこっぴどく怒られた。まあ非常に厳格な訓練を受けたんじゃないかしらという気がしますね。しかしどこかでそういうしつけを受けた方がいい」（pp. 273-274）と。これからで見ても、村岡は附属中学校の実習をきちんと取りまとめ、本校の学生の実習での躰を含めた指導をきちんと行って、実習の質を保つ努力をしていたことがわかる。

なお、福原（1978）のp. 289には、8. 先生と使用教科書という節があり、その中で、昭和3年4月より昭和7年3月までの間に東京高等師範学校の学生が4年間に教えを受けた先生と使用教科

書名が記載されている箇所がある。その中に4年の講義「英語教授法」が村岡博によって担当されていたとある。この記述は先の高梨（1985）のものと一致する。東京高等師範学校の「教授法」の授業は附属中学校の教員が行っていた。東京文理科大学・東京高等師範学校（編）（1936）には、附属中学校において明治40年（1907）に定められていた「教生指導規程」が6項目載せられているが、その内の一つに、「1. 附属中学校の各学科主任教官は、本校の最高学年の第二学期に於いて其の科の教授法を講義し、実地授業の準備とすること。」（p. 303）というのがあり、その規程にも村岡のような附属中学校の英語科主任がその授業を担当したことの根拠が見いだせるからである。

最後に、村岡の著書を挙げて、彼の概略を終えたい。彼の著書には、先に述べた、岡倉天心（寛三）の『茶の湯』（昭和4年（1929）、岩波文庫）、『日本の目覚め』（昭和15年（1940）、岩波文庫）及び『東邦の理想』（昭和18年（1943）、岩波文庫）の翻訳がある。その他、『英習字講話 英語』（昭和15年（1940）、研究社学生文庫）、学習参考書として『やさしく・くはしい二年生英語学習の友 英文解釈編』（昭和8年（1933）、大修館書店、石橋幸太郎と共著）、さらに英語の指導に関しては、英語教育業書の一つとして『初学年の教授とローマ字』（昭和11年（1936）、研究社）がある。

なお、村岡が『茶の本』の翻訳を行うきっかけになったのは、天心の弟であり、元高等師範学校教授で彼の恩師である岡倉由三郎が主宰した洋々塾に同人として加入したことによる。この塾は言語と文学の理解鑑賞によって東西文明の融和をはかることを目的として大正12年（1923）に成立した。同人は、岡倉と村岡以外に、清水繁、武井亮吉、寺西武夫、野村繁、福原麟太郎の諸氏であった（福原，1978，p. 71）。本書は、その洋々塾の雑誌である『亡羊』に昭和2年（1927）から昭和3年（1928）年にかけて10号に亘って訳として掲載されたものが岩波文庫の一冊として収められたものであると岡倉由三郎は『茶の本』のはしがきに書いている。

Ⅲ 村岡の英語学習初入門期の指導法について

前述した通り、村岡は昭和6年（1931）に『初学年の教授とローマ字』という書籍を発刊している。これは昭和初期に研究者によって刊行された英語教育業書の1冊である。この本の内容は彼の英語の入門期の生徒の指導方法の集大成となっている。この本から、彼の入門期教育の考えの骨子を述べていくことにしたい。

まず、中等教育における英語指導において入門期の教育の重要性を主張しているが、H.E. Palmerの*The Principles of Language Study*の「初学程度の最も大切なこと」を引きながら、英語の全課程が結局成功するか否かは全く初等期の授業の成否によるとし、丁度小枝の時の曲がり角がその木の形を決めてしまうように、初等程度の学生の訓練が後の成否を定めてしまうという（村岡，1931，pp. 12-13）。その理由として、正確な習慣を作るのも、耳を使うように馴らせるのも、自然的な速い同化力を発達させるのも、観察力を培うのも、皆初等期の間だからであるからという。学習の初めの者は総て型に入れ易い心を持っているので、こちらの意のままに形を付けることができ、この時期を外せば、もうそれだけの融通性を求めることが出来ないともいう。

では、次に中学校1年生の夏休み前まで、どのようなスケジュールでどのような指導をするべきかの彼の考えを述べることにする。

何から指導を始めるかについては、いきなり教科書には入らず、基本的にまとまった文章の口頭練習から始め、少なくとも数週間のground workを行うこととするようである。ただし、授業に入る前に英語授業の最初の日、少なくとも15～20分くらいの時間を使い、日本語を用いて英語学習に関する話をするのが良いとしている。例えば、「英語も日本語と同じように、口で言うことが本体である」、「英語を学ぶ近道はよく聴いて、よくまねをすること」、「筆記をしないこと」、「教室で一心

不亂にやれば家で練習することは当分ない。次の時間までに忘れてもよい。現像されない写真のように、頭の中には何か残っている」等を生徒に話してやるとのことである（村岡，1931，p. 22）。

4月の最初の1か月の段階では，Introductory Lessonから始める方法を推奨している。この初歩的期間の予備的な練習の間は教科書を用いない，ということである。この時期は発音の予備練習に当てられる。具体的には，まとまった文（sentence）を音のみで提示し理解させる方法で，「発音と綴字の連絡を主として排列したもの」と「発音を組織的に練習するように排列したもの」の二種類である。それゆえに，alphabetから入り，すぐに本文に移って，発音・綴字，意味を合わせて教える方法や第1時より音標文字（発音記号）を組織的に授ける方法も少し遅らせて導入した方が良いとする。その理由として，前者については，alphabetの名称を英語発音の基礎的練習とするに足る扱いは容易なことではなく，この名称に現れない音素の中に日本人には困難な音がいくつもあるからということで（村岡，1931，p. 20），後者については，音標文字の記憶が言語学习上必然的に重要なものではなく，作業が単調になり易く，生徒に対しかなり大きな負担になるからであるといっている（村岡，1931，p. 21）。

ではどうしたら良いか。村岡曰く，最初，新語である単語を画用紙に太く書いてカードにして，これを重ねておいて代わる代わる読みながら見せ，音と意味とを提示する方法を推奨する。この方法だと，規則を教え，説明するよりも短時間で多くの単語を覚えられることやまたこうして覚えた単語がいくつか集まってからletterの音の分解，つまりalphabetの提示と音の学習をしても遅くはないからということである。ただし，この作業は入門第一週に行うべきではなく，口頭のみによる練習時期を経て，音声と文字の連結を図る時の問題であるということである。なお，カードについては，文字を見せながら生徒に英語の発音をさせ，文字を提示して発音と意味とをいわせる練習を想定しているということである（村岡，1931，p. 20）。

村岡が担当していた東京高等師範学校附属中学校の第1学年の第1週の教授事項は概略，以下のようなものであったようだ（村岡，1931，pp. 28-29）。

What is that (this)? It's a map. Stand up. Sit down. Look up. Look down.

Look at me. Go to the door (wall). Touch the door. Shut your book (window, door).

Open you book. What color is it? It is red (white, black, blue, yellow). This is a red (long, short, large, small) pencil. Where is the blackboard? It is there (here).

Good morning. Thank you.

以上のSentence Patternsを練習しながら以下の様な単語を示したということである。それらは，pen, pencil-case, match, desk, chair, bag, cap, table, please, floor, ceiling, platform, picture, line, pear, peach等であった。

さらに，村岡の担当する第1学年のクラスの5月，6月，7月の指導内容は以下の如くであったという（村岡，1931，pp. 29-33）。

- ・4月中旬から以後，自修時間用教材として日本語の仮名と比較しながらphonetic symbols（音標文字）を説明した謄写版刷を生徒に19枚に亘って渡し，5月中旬に渡し終えた。あくまでこれは自習用である。
- ・5月中旬：Palmerの*The First Six Weeks of English*と使用教科書の*New Union Reader*巻一の52ページまでの中から重要だと選んだSentence Patternsについて音声提示と理解，そして発音練習を一通り行った。
- ・5月中旬：蓄音機を教室に運び，*The First Six Weeks of English*のレコードを聴かせる。
- ・5月下旬：カードを用いて，既習の単語の文字を示す。そして英語の文字を読ませる。カードの枚数は1時間5～6枚程度。

- ・ 5 月下旬：厚紙に文 (sentence) を書いて、その一部の単語を変えながら文を読む練習を始める。パターン・プラクティス (代入練習) のような練習だと考えると良い。
- ・ 5 月下旬：日本の五十音と ABC の alphabet の話しをする。
- ・ 5 月下旬：alphabet の名称と書き方を四線ノートで練習。同時に phonetic symbols で alphabet の名称 (26 音) を書いてみせる。5 月中に全 alphabet の名称と書き方の練習終了。letter の見分けが皆できるようになる。
- ・ 5 月最終日：ここで初めて *New Union Reader* 第 1 課の読み方に入る。ここで漸く教科書の文字に触れる。
- ・ 6 月初旬：生徒の聴き方、Short answer の response もかなり敏速にできるようになる。
- ・ 6 月中旬：ローマ字の表を見ながらその読み方と書き方の説明し、クラス全員の名前をローマ字表を見ながら書かせる。
- ・ 6 月下旬：筆記体文字を初めて教える。
- ・ 6 月下旬：筆記体文字の指導終了。
- ・ 7 月初旬：英習字を行わせながら夏休みに入る。

さて、次に村岡は発音教授の重要性を説いている (村岡, 1931, p. 39)。

彼曰く、何でも始めが大事だということは明らかなことではあるが、特に外国語の発音については「初め良ければ全て良し」といっても過言ではないという。その理由として、発音指導について、最初に努力しておけば後は比較的楽であるが、これに反して初めいい加減に悪い習慣を作っておいて、後に矯正するのは非常な努力を要する故だという。また、発音指導においては、教師の範読が何より大切で、口形図も発音器官の説明も音標文字もすべて指導上の便法であって、必ずしも必要なものではなく、発音の指導が仮にできても、実際の模範が示せないとその効果は少ないということである。

最後に、第一学年の各分科の教授について触れる。分科とは、今でいう 4 技能や文法等の英語教育における技能分類、あるいは分野のことである。

まず、第 1 学年の英語指導においては、村岡は英語科各分科 (各分野) の教授が十分に連絡を保って行われ、部分的に偏しない、理解と発表・表出の円満な発達を図り、教授の能率を増進することが目的であるとする (村岡, 1931, p. 62)。つまり、4 技能や文法の指導のバランスの取れた統合的指導が重要であるということだ。そして、この目的を達成するためには、初学年の教授の中心には読本教授が来るべきだとしている。この読本教授が中心となってその他の分科 (分野) である聴方、話方、作文、書取がこの読本教授と連絡を保って行うことが英語学習の経済であり、教授能率の増進だとしている。現在の高等学校の新学習指導要領において新科目として「英語コミュニケーション I・II・III」が設けられているが、例えば、「英語コミュニケーション I」設定の目的は五つの領域を総合的に扱うことを一層重視するためとされ、「同 II・III」については更なる総合的な英語力の向上を図るためとされている。読本を中心として他の技能や領域が連絡を保って行われるというコンセプトは高等学校の新学習指導要領の「英語コミュニケーション I・II・III」の設定目的と通じるところがあるように思える。

その他の分科については、読本教授それ自身について、附属中学校で岡倉由三郎の提唱以来継続して実施されてきた新教授法を踏襲しており、その原則は、村岡 (1931) 曰く、読本つまりリーディングの領域といっても、「耳と口の作業が一時間の大部分を占めなければならない。音声による了解発表に熟して、次の目に訴える reading の作業と、手による writing の作業が加わって来る。此の reading は文としての言葉調子が、その内容と一致して融合の状態になって始めて読本教授の効果があがるのである」(p. 63) ということにある。その授業手順は、まず、Oral Introduction がくる。ここ

で、繰り返し本文の表現や構文、内容が口頭で生徒には聞かされ、理解が十分なものになるようにする。次に、Test Questionがくる。ここでは比較的簡単な問いがなされるべきで、できれば教師の質問を模倣して、あるいは援用して生徒が答えられるものにするべきだとしている。ここまででテキストの本文内容の理解が行われ、次にreadingの段階がくる。この段階は現在の音読の段階である。教科書を開かせて、ここで教師の範読が行われ、生徒の斉読、個人読みと続く。その後、暗唱、書取へと続くが、この書取では、英単語や英文を言わせながらノートに書き取らせるのだという。最後の段階には、予習、復習及び課題作業がくる。第1学年では、予習よりは復習作業が中心となるべきだと村岡は述べている。

一方、作文教授については、その目的は、英作文の練習によって、既習の単語活用と単語の定着、構文研究、英語と日本語の語法の相違の認識、英文を読む習慣形成と前置詞や冠詞等の文法の用法に気を配らせること（村岡、1931、p. 67）であるとしている。つまり英作文を英語学習の様々な要素の補助訓練として考えているということになる。

文法教授については、あくまで読本で授けたことを基礎として機能的に授けるのが有効であるということで、文法の規則を教師が授けるというよりも、生徒自ら文法規則を発見させるように努めるのが良いとしている（村岡、1931、p. 69）。たくさんの口頭による英語提示のその多様な例の中から文法の規則を意識・認識・発見させるnoticingのプロセスが重要という意味なのであろう。

いずれにせよ、以上に説明してきた各分科について、読本、作文、文法教授は、中等学校において各学年を通じて主要な地位を占めているものであるが、村岡は、その効果を上げるには、前に度々述べたように、総合的な取り扱いによらなければならないと述べている（村岡、1931、p. 70）。

IV 村岡の新教授法に対する考え

東京高等師範学校附属中学校が英語教育の教授法として採用していたのが、新教授法といわれるものであった。この新教授法には2つの意味があり、1つは、「古い歴史を有った諸種の教授法の短所を補い、長所を集め、それぞれ或る目的のために最良と思われる諸種の教授の工夫を参考して、集大成せられたもの」（村岡、1931、p. 14）という意味であり、「Grammar-Translation, Direct Method, Oral Methodの夫々の実行し得る長所を取り入れた総合的方法」（寺西、1940、p. 164）ということで、過去の英語教授法の長所を集めた折衷指導法のことである。またもう1つは、Palmerによって提唱された口頭練習中心の教授法Oral Direct Methodを日本の中等学校の英語教育用に改良したものという意味である。後者について寺西（1940）は、「方法的にはDirect Method的techniqueを、殊にその初步に於て大いに利用するけれど、母国語の資料に関してはDirect Methodの場合の如くに之を必ずしも敵視しないのである。否むしろ却って母国語を教授の媒介として大いに利用することもあるのである」（p. 164）と述べている。

村岡がこの新教授法について問題にする場合には、後者のPalmerが唱導したOral Direct Methodの改良版についてのことを大方意味し、これを日本の英語教育現場に如何に応用すべきかが彼の関心であった。

ところで、東京高等師範学校でこれら新教授法が導入されるようになったのは岡倉由三郎によってである。大正11年（1922）にH. E. Palmerが来日し、Oral MethodやDirect Methodについて彼が所長を務める英語教授研究所の研究大会の中で日本の英語教育界にその原理や教授法が広められるようになったが、「パーマー氏の説に兎角の論が起り、パーマー自身その節を修正したり、英語教授研究所が石川前所長を中心に研究を遂げて最後に到達した所は要するに岡倉先生の「英語教育」の論旨に帰着するのである」（村岡、1941、p. 166）と村岡は述べていることから分かる。なお、村

岡は大正12年(1923)に附属中学校に赴任するが、赴任1年目に、岡倉が附属中学校で入門期からの系統的な教授を行ってみたいとの希望から、理想的な授業の実施と計画を立てた折り、彼は岡倉の授業記録をノートに取る役目を仰せ付けられたことがあった。残念にも、その記録はその年に起こった関東大震災により中座され、記録ノートも散逸したとのことである。

さて、そのような状況で附属中学校に導入された新教授法であったが、村岡は常々、Palmerによって我が国の外国語教授の実際に植え付けてから数十年の年月を経ているのに、そして外国語教授に関心を持つ程の人で、Oral Direct Methodに多少でも手を染めたことのない人はおらず、しかしながら、我が国の英語教授の成績は、近年向上したとはいえ、満足すべき状態には達しておらず、中等学校の外国語教授の時間数削減や、教科廃止の問題さえ起っているのを嘆いている。そこで村岡は、昭和13年(1938)に自らの学校の研究機関紙『中等教育研究』に「オーラル、ダイレクトメソッドの将来」というタイトルで論考を執筆したのである。本論考では、この新教授法が教授効果を挙げない理由を挙げながら、現状の教育環境下で、つまり現状の教材と時間数の中で本教授法を如何に有効に工夫改善すべきかを述べている。以下、まとめてみたい。

そもそも本新教授法に関しては、口頭練習を中心にしながら英語の理解と表出の力を伸ばす方法として有効さを認識されながらも、実施する上での教授上の困難点がいくつかいわれている。例えば、寺西(1940, pp. 67-68)は、Direct Method適用上の困難は上級に進むにつれて増大する可能性が高いとする。その理由は2つ。1つは、教材の英語のレベルが上がることで、扱う英語のレベルが教師の会話能力を超えてしまうこと、2つ目に、特に新教授法の指導法の1つである本文に関するOral IntroductionやQuestion & Answerを準備することに教師の負荷が過重になるということを挙げている。寺西(1940)は、「教材の内容が抽象的な理論であったり、或は生徒の理解力と並行した程度まで高められた内容である時、換言すれば文中の或単語や熟語のparaphraseを以てしても文全体の内容を理解せしめること困難なる場合、Direct Methodの破綻が生じる」(p. 68)とも述べている。新教授法の実施にはいくつかの困難が伴うのである。

本論考ではまず、そこでOral Direct Methodが用いられることが想定されている読み物教材であるA. S. HornbyによるThe “English as Speech” Seriesの“The Bullet-Proof Jacket”というテキストを取り上げて、その本の序に述べてあることに言及しながら、村岡が考える本教授法を日本で有効に実践するための実践方法を提案している。なお、本シリーズは英語教授研究所より昭和6年(1931)より昭和11年(1936)までの間合計15冊が発刊された。Hornbyの意図するOral Direct Methodの授業構成として、①Explanatory Introduction to the Story(所謂現在のOral Introductionのことである)、②Questions & Answers、③Composition Exercisesの流れがあると紹介されている。

村岡は、本テキストを使って約1時間の授業を実施している。まず、以下にテキスト本文を載せる。

The Bullet-Proof Jacket

A man called on the Duke of Wellington and showed him a jacket which he had invented for soldiers, and which, he said, was bullet-proof.

“Oh!” said the Duke, “just put it on.”

Then he rang the bell and said to the servant who answered it:

“Tell the captain of the guard to order one of his men to load his rifle and come here.”

The inventor disappeared and the Duke never saw him again.

村岡は以上のテキストを用いてOral Direct Methodを行ったわけであるが、対象は附属中学校の第三学年の生徒であった。授業手順は、①Oral Introductionによりテキストの意味を了解させる(15分)、②40のQuestions and Answers(以下、Q & Aと省略)(15分)、③readingを行い、2, 3の必要な説明を日本語で与えて、内容的なidentificationを行う(30分)。もしこれにcomposition exercisesを

行うにはさらに約1時間を要するだろうということであった。なお、教科書本文を開かせるのは②の後に行ったとのことである。

村岡が本論考で授業方法として授業準備負担を減らす方法として挙げたことは、例えば、①のOral Introductionについては、日本人の教師がこれを作る場合、準備に時間が掛かり相当負担になるので、textのIntroductionとしてテキストのまま何回も読んで聴かせることでも良いのではないかとしている。次に②のQ&Aについては、Hornbyの本ではQ&Aを40項目用意するのが理想とされているが、それが無理なら、textの内容の理解の程度を試すものだけではなく、簡易なもの、Yes, Noのみ答えるものや教師の問いの一部を利用して答えを作り得るものを入れても構わないとする。③のComposition Exercisesについては、Oral Direct Methodによる瞬時の口頭表現を求める方法でなくとも、単なる英語の書き取りを頻繁に行うことやtextに基づいた短文を問いの形に変えさせるのでも良いとしている。また、教師の処理、つまり答えのチェックを省略するため、修正は生徒の家庭学習に任せても良いとしている。

以上の指導課程において、テキスト理解が十分に行われるだろうかとする懸念に対して村岡はまず、テキスト全体の訳述はこの教授法では行わない、全部の訳述は行わないが、真の理解に達するよう必要な箇所は十分に説明する、ただし家庭学習として、テキスト本文の書き取りと全訳付けを生徒にノートに行わせ、そのノートを授業に持参させ、時々、各自のノートから生徒に訳を読ませて批評を与えるのが良いとしている（村岡、1938, p. 28）。

最後での彼の本論考での主張は、Palmerが主張する純粹なるOral Direct Methodを行わなければ教授法としての価値が全くないわけではなく、日本人学習のために彼らに合うべく改良された変種栽培の方法で無理のない形でこの教授法を実践すれば良いとしている。さらに、Oral direct Methodにおいて重要な点は、外国語教育の要素として知識としての方面と技術的方面とがあり、知識的方面は技術的方面の基礎の上に立って十分発達を遂げるという原理であり又考え方であると村岡はする（村岡、1938, pp. 29-30）。つまり、本教授法の技術的方面、耳と口を中心とする外国語の習慣形成作用により学問知識面も発達する、あるいはまた、音声としての言葉の錬磨を英語科の全コースに亘って重視し、習慣形成を重視しつつ、それが読む方面や各方面にも良い影響を与えていくであろうというのが村岡自身の外国語発達に関する主要な考えである。なお同時に村岡は、短期間に外国語を養成するには毎日、多数の時間を必要とし、外国語の習慣形成が容易でないことへの警告を発することを忘れてはいない。

V 考察（英語教育指導観について）

ここまで村岡の英語教育に関する考え方と実践の方法について、特に2つの分野、英語の初学年教育と新教授法について見てきた。ここから、村岡に見られる英語教育観について述べてみたい。

まず、英語学習や習得のプロセスとして、音声から入り、やがて文字の学習に至るが、音声を基礎としてそれが他の技能の習得を強化させるという考え方である。今風にいうと、音声中心の教育から入り、英語の音声によるインプットを増やす中で英語の情報処理の能力を高めながら、最終的に4技能の統合的スキルを高めていくというのが英語の能力を高めるのに有効である、というのが村岡の基本的な教育スタンスであることになる。音声によるインプットを繰り返し頭に入れることで、英語自身の情報処理が速くなり、結果として、英語の直聞直解力が増し、最終的に直読直解力に繋がり、英語習得の効率が上がるという考え方である。

東京高等師範学校附属中学校に教授細目というものが英語科の教育基準として存在しているが、その内容も村岡の考えと軌を一にしている。教授細目の基本的な考え方は岡倉由三郎の英語教育に

関する考えの反映であり、この理論は明治44年（1911）に発刊された彼の著書『英語教育』の中に記述されている。岡倉の英語教育の最終目標は英語を読む力の増進であるが、よって村岡の英語教育の最終目標もこれと同じということになる。この考え方は、当時の時代、特に明治時代において日本は世界の文化・文明に遅れており、外国語の文化や学問の吸収に英語を役立てるのが最も重要なことであるということと英語が実際に国内で話される機会は少ない故に、差し当たり読む力の育成が英語能力の育成の実用として意味があるという理由で取り上げられたのではないかと思う。

村岡の考え方にはまた、理論と実践の融合ということに堪えず心を砕いていたのではないか、という特徴がある。昭和6年（1931）に発刊された彼の著書『初學年の教授とローマ字』の緒言には、この書籍の意義について、「英語教授上の諸種の原理方法等一般に關しては他の諸先生が擔當せられて、十分に述べ盡くされてゐる筈であり、従つて初學年の教授に關しても、その理論方面は多く言及せられてゐるから、私は英語教授の實際方面に就いて、なるべく詳しく述べてみたい」（p. iii）と述べられている。当然、本書には初学年の英語教育の方法についてたくさんの実践例が載せられているが、同時に「入門期教授に關する諸家の意見」という節があり、実践の裏打ちとして諸家の理論についての言及もある。また実際に彼自身、自分の実践についての実験も附属中学校で行っていたようで、実験後の考察的知見も述べられている。

最後に、諸外国や他者が考案した理論や方法について、彼自身それをただ鵜呑みにして取り入れるだけでなく、自己の実践上でその効果を検証しながら、場合によっては自らの生徒にうまく適用できるように方法を修正して指導に生かしていたようである。

VI おわりに

村岡について、村岡の死後、彼を偲んで当時元同僚の山邊吉也がその実像を描いた箇所がある。それには、「先生は極めて着實な人であつた。何事をするにも丁寧懇切を極め、いゝ加減では濟まされぬ人であつた。私は考へる、steadyという言葉くらい先生の御性格を良く言い表はす言葉はないのではないかと。このことは「茶の本」の譯し振りを見ても、「東洋の理想」其の他の注釋を見ても、容易に察せされることゝ思う。先生は附屬時代には公使に頗る多端のように見受けられた。にも拘らず、生徒に與へるプリントの作成や宿題の處理等は、其の都度決して欠かされたことはなかつた。聞けば先生は、そのためわざわざ然るべき人を備つて居られたとのことである」（山邊、1946、p. 44）と書かれてある。

村岡は真摯に英語教育に向き合つた教師であつた。残念なことに長寿の家系であつたが戦禍が彼の命を奪ってしまった。村岡の名前は現在、岡倉天心（覺三）の英語本の翻訳家として有名であるが、それ以外、英語教育の分野でも優れた人材であつた。それを知らしむべく今回の論考を著した。今後も彼の教育や業績について研究を進められればと考えている。

引用文献

福原麟太郎（監修）（1978）『ある英文教室の100年』大修館書店。

伊村元道（1997）『パーマーと日本の英語教育』大修館書店。

村岡博（1931）『初學年の教授とローマ字』大修館書店。

村岡博（1938）「オーラル、ダイレクトメソッドの將來」『中等教育研究』第七卷第二號、15-30、東京高等師範学校附属中学校中等教育研究会。

村岡博（1941）「岡倉先生英語教育ところどころ（5）」東京文理大学・英語教育研究会（編）『英語の研究と教授』Vol. X、166、興文社。

高梨健吉（1985）『英語の先生，昔と今ーその情熱の先駆者たち』日本図書ライフ.

寺西武夫（1940）「新教授法適用の問題」東京文理大学・英語教育研究会（編）『英語の研究と教授』
Vol. IX, 67-68, 興文社.

寺西武夫（1940）「英語教育論壇（新教授法とは何か）」東京文理大学・英語教育研究会（編）『英語
の研究と教授』Vol. IX, 164, 興文社.

東京文理科大学・東京高等師範学校（編）（1936）『創立六十年』非売品.

山邊吉也（1946）「村岡先生を憶ふ」東京文理大学・英語教育研究会（編）『英語の研究と教授』
Vol. XI, 44-45, 愛育社.